

応用地形判読士を受験して

国際航業（株） 高見 智之



近年、防災・減災に対する社会の要望が高まる中、地形からより多くの情報を取り出す技術の向上がより一層求められるようになってきている。これには、次の二つの要因が考えられる。一つは、地形を解析することにより、広範囲の大局的な地形地質情報や、それに基づく社会活動に対するリスク情報を低コストで得られることが期待されているためである。もう一つは、航空レーザ測量に代表されるような高解像地形データの普及で地形解析の可能性が飛躍的に高まったことによる。

地形に関しては、ある程度経験をつんだ地質技術者やコンサルタントはそれなりの知識や教訓を持っている。それは災害対応を経験したり、予測を上回る事態を招いた失敗事例などの経験によるものだ。後から考えると、もっと周辺の地形をよく見ておけばリスクを把握し的確に評価できたかもしれない、という思いを持った経験が誰にもあると思う。

しかし、これらの経験には偏りがあり、普遍的な知識ではない。地形に関して知っているつもりであっても、実は自分の経験したローカルな知識であり、一面しか見ていないこともあり得る。地形学を高度に応用して地形地質的課題を解決する手法に関して、体系的に勉強した人は意外と少ないかもしれない。

そのような現状の中で、応用地形判読士という新しい資格制度がつくられ、応

用地形判読技術の普及と、技術レベルの認定が進められることになった。

私は長年、地形地質に関する調査解析に携わり、問題課題の解決に活用してきたつもりであるが、いざ客観的に評価されるとなると、はたしていかほどのものか、一抹の不安をおぼえた。資格をとっても活用する期間はまだ残り少ない歳となってしまうが、これまでの知識や経験を整理して再認識するいい機会だと思い、受験を決めた。落ちた時のリスクの大きさを実感しながら。

さて、この試験は一次試験と二次試験があり、時間と経費がかかることを覚悟する必要がある。一次試験は、筆記試験でマークシートの択一問題と、記述式問題がある。択一問題は地形や地質の一般的な知識が問われる。一見、地形と関係が薄いと思われるような問題もあり、第四紀地質学や国土地理院出版物など幅広い知識が必要である。

記述式問題は、2問の内一つを選択して記述するもので、低地と山地の二つが出題される。地形の発達史や堆積物の推定、防災上や土地利用上の問題点などを問われる。山地の問題では、二万五千分の一地形図を示されて日光の火山地形が出題されたが、土地勘のない地方技術者にとっては、ちょっと不利かもしれない。記述式での回答は、地形学の知識を動員して書くだけでは答案用紙が埋まらず、「推論」することが必要である。この推

.....

論の仕方が、地形学特有の論理展開であり、ちょっとした慣れと度胸が必要である。地質屋からすれば、「現地で見ないとわからないだろう」、「そうではないかもしれない」と思うかもしれないが、等高線や地形記号など地形情報から地形の成因や営力など最大限の推論を論理的に展開し、問題解決の近似値に導く。

さて、仙台会場では30数名の受験者で6名の「応用地形マスターⅠ級」、6名の「応用地形マスターⅡ級」の合格者があった。マスターⅠ級合格者は、二次試験の受験資格が得られる。

二次試験は、東京の小平にある建設大学校の隣にある研修センターで実施される。9時半頃に受け付けが必要であり、地方からの受験者は前泊となろう。実技試験であり空中写真判読をするので、実体鏡を持ち込む。大型の実体鏡であれば自分でセットする。

二次試験の問題は、やはり低地と山地の2問があり、モノクロの空中写真と二万五千分の一地形図で地形分類図を作成し、さらに設問に記述式で答える。業務で地形分類図を作っている人は有利だ。色鉛筆で記入・着色するので、アナログ作業に慣れていない人や、細かいものが見えにくくなった高齢者は不利だ。作図を完成し、さらにその図から読みとって設問に答えるため、時間が厳しく、時間配分を間違えると最後までたど

り着かない。作図で色塗りに凝ったり手間取ったりしないことが肝要だ。

二次試験の結果はまだであるが、結果はともかく、久々の試験でアンチエイジングになった。目の衰えと手作業のスピードダウンを実感した結果となった。現役の若手が有利である。受験者層は、会場で見ると、高齢者（失礼）と若手のバイモーダルのように見えた。今後、幅広い領域と年齢層からの受験者が増え、試験を契機として、応用地形学を問題解決の道具の一つに加えて社会貢献できる人材が育つことを期待する。